「終戦前後－賀茂高女生徒の活動－」

加藤　宣子

昭和二十年四月はじめ，私は県立賀茂高等女学校勤務となった。三月末までは広島市内河原町にあった県立衛生試験所で働いていたのだが，恩師のおすすめを有難くお受けして思い切って未経験の場へ飛び込んだのであった。後にして思えば恩師・同窓の先輩の先生方にはいくら感謝を捧げても足りない私である。しかしその時は先のことは何もわからず，無我夢中で緊張の連続の毎日を過ごしていた。

授業は一，二年生の化学を受持っていた。三年生は本館二階と講堂を工場として被服廠の作業に明け暮れ，雨天の日の朝礼など廊下に整列して，吉田校長先生や河野先生，堀井先生などによるお話を生徒達は窮屈そうに聞いていた。

六月になって，私は広の第十一空廠へ附添教師として行くことになった。四年生，補習科生は広，阿賀等にあった軍関係の工場でずっと同じ作業に従事していたのだが，先生方は交代しては授業をするという状態であった。

私の着いた寮は広町古新開にあって，工場は二キロばかり離れた山深く掘り込んだ隧道内にあり，生徒等は夜，昼交代で工場に通っていた。狭い工場であったが外で見る彼女らとは全く違うきびしい表情で取り組んでいるその手もとから，次々と兵器が光沢を放ちつつ生産されていた。

隧道の奥処に軍の工場ありて乙女ら励みき昼夜交代に
整列し夜の道をゆく乙女らの工場までを軍歌うたいて
乙女らがひたに取り組む旋盤の音底ごもる隧道のなか
航空廠寮の壕より出でて見き空襲に呉の街焼けゆくを

昭和二十年七月一日，呉市街が空襲により一夜にして焼野原になった日である。警報が鳴り，寮の生徒や私達は急いで壕に退避した。同じ寮の他校の生徒も一緒であった。頭上にバラバラと機銃掃射されるのもわかった。幸い阿賀や広の工場，寮ともあまり被害はなくて済んだが，壕から出て見ると呉一帯が呉工廠はじめ一面の大火災で夜闇に上る焔は物凄く私等は茫然と立ち尽くしたのであった。

しかしその後も空廠の仕事は相変らずで，指導将校の益々厳しい監督の下に作業は継続されていた。一カ月ばかりで私は交代して学校へ帰って来た。

八月六日の朝，私は学校二階の図書室にいた。八時十五分，ピカッと光を感じ窓から身を乗り出すと異様な西空である。急ぎ一階に下りると先生方は職員室の前の廊下に集まっておられ，皆不安な面持で，広島がやられたらしいとの声々

であった。吉田校長もそこに居られたが，ちょうどその頃ご子息は広島一中生で市内で被爆され苦しんでおられた頃である。そのうち原村の三年生，上田茂子さんの母上が来られ，娘が自分の代りに広島市内の叔母の法要に行っていると話され，俄かに不安が身近に迫った感じだった。

上り列車が着く度に負傷者が西条町内の病院や療養所へ運ばれているとのことで騒然とした空気が広がった。行方不明者を探し，或は救護の目的で消防団，救護隊が次々と広島へ向った。賀茂高女からも男性の先生方を中心に手分けして入市された筈である。

八月十五日の終戦，皆茫然自失状態であったが，八月十七日，遂に賀茂高女にも動員令が下り賀茂高女教援隊を編成して三，四年生は桧山博教諭を団長として広島へ入市した。私達の班は，白島町の逓信局，隣接する逓信病院で炊事することになった。炊事道具とてなく使えるものは大釜とバケツ，破れた水道くらいであった。あの懐かしい広島の街が廃墟になっていた。漸く死体を片づけたばかりの状態で，病院の隅には粉々のガラスが山積され血まみれの白衣が片寄せてあるのを見た。建物といってもコンクリートの壁と床だけで何か敷物を敷いて沢山の被爆者が臥かされ，傷口深く蠢く蛆，まつわる蠅，苦しまれるその姿は悲惨そのものであった。医師の手当といってもピンセットで蛆を除いたあとに赤チンと油薬を塗布する程度で，その酷い有様を眼前に見ながらどうすることも出来ないのである。生徒達は汗まみれになりながら炊事し，手を真っ赤にしておむすびを握りつづけた。

被爆者らに飯すすめいる乙女子よ救援の日々を廃墟に炊ぎて
グランドに死者葬りつぐ夜々の焔黙し見ていき看りのおとめら

日も経ずして二度目の入市で今度は大河国民学校での救援であった。生徒等は二班に分れ看護と炊事を分担した。此処は比較的破壊も少なくて，講堂や教室が治療室・病室とされ女医さんの指導の下で看護班が専ら手当にあたった。炊事班は運び込まれる米や僅かな野菜を食べ易いように工夫していた。被爆者の方々も臥床しながら話し合ったりして一見，落着いて見えても油断は出来ず，紫斑，俄かな吐血，呼吸困難が襲い次々と亡くなってゆかれるのである。

屍体は校庭の一隅で石油をかけて葬られた。

感じやすい年齢のおとめ等に衝撃の連続であったに違いない。戦争の恐ろしさ，惨めさにひたすら堪えて全力を盡した彼女等を尊いと思う。

原爆犠牲者となった上田茂子さんの遺体は遂にわからなかった。また高屋町小谷へ嫁いで来ておられ，怜悧で明るかった幾田さんも先年白血病で亡くなられたが，この方も救護隊の一員として同行されているので，或いはその犠牲かと

思えばいたましい。

戦後 家庭人となり母となった彼女らもすでに五十代も半ばの筈である。くれぐれも健康に留意されて，健やかで有意義な生活を送ってほしいと願い，同時に核兵器廃絶，永遠なる平和の実現を心から祈らずにはいられない。

大雨の被害による遅れもあって高学年の授業が再開されたのは秋も半ばであったか。徐々に女学校らしい雰囲気に戻っていった。

但し教科書は従来のを使用しているものの戦争に負けたのだから当然とも言えるが，その内容は大方墨で抹消され，殆ど真っ黒になっているところもあった。もっとも理科系の授業にはあまり変りはなかったが。

私は相変らず授業の拙さを反省しながら科学の実験にしても，実習器具が足りないので大困りしながらも何とか工夫したりしながら，だんだんと教室で生徒等に接することにも馴れ，自信めいたものも生まれて来て，意欲が持てるようになっていた。上級生等と呉や広島で一緒に寝起きして，信頼感が育っていたことも役立っていたような気がする。私が受持った物象という学科は，私に資格のあった科学の外に気象，天文まであって，いっときは一年生から四年生まで授業を受持って，下調べにおそくまで学校に残った。幸い旧校舎の理科準備室には，先輩の先生方がたくさん参考書籍を蒐めておられて，私はだんだん自分自身でも面白くなって心が弾んでくることもあった。

そのうち学校の名称は，広島県賀茂高校と変更され，学校長も箱田実先生になられた。理科の友安一二教諭も復員して来られ 後に県議になられた地元寺西出身の社会科担当の佐竹久登先生の明るい声が職員室に響きわたったり，生徒のグループ活動等も盛んになって，いきいきした学校に変わっていったことをなつかしく思い出す。

古いメモから拙い短歌を添えてみました。母校の益々の発展を祈りつつ。